

## ラウクハルトとプロイセン軍

|       |                                                                                                                     |
|-------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| メタデータ | 言語: jpn<br>出版者:<br>公開日: 2018-03-30<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En):<br>作成者: 鈴木, 直志<br>メールアドレス:<br>所属:                  |
| URL   | <a href="https://tohoku-gakuin.repo.nii.ac.jp/records/24049">https://tohoku-gakuin.repo.nii.ac.jp/records/24049</a> |

特集 近世・近代ドイツにおける兵士の世界

## ラウクハルトとプロイセン軍

鈴木直志

1. ラウクハルトの駐屯生活
  - (1) 入隊の動機
  - (2) 教練・査閲・教会行進
  - (3) 賜暇と副業
  - (4) 宿営
  - (5) 刑罰
2. プロイセンの軍人たち
  - (1) 将校
  - (2) 下士官・兵士
3. 戦時のプロイセン軍
  - (1) 行軍と宿営
  - (2) 掠奪
  - (3) 衛生と野戦病院
4. 結びにかえて

18 世紀末に刊行されたフリードリヒ・クリスティアン・ラウクハルト (Friedrich Christian Laukhart) の自伝的著作については、上西川原章氏によるすぐれた抄訳が二冊あり、すでにわが国でも知られるところである<sup>(1)</sup>。訳者によれば、「ドイツ文学史上の変り種」と呼ばれるこの作品に対して、文学史の主流評価は「これを全く取り上げないか酷評するか」のどちらかであったという<sup>(2)</sup>。たしかにこの著作は、カトリック教会に対する激しい憎悪に満ち、なおかつ酒色に溺れた自らの自堕落な生活を公言してはばからないため、強い批

<sup>(1)</sup> F. C. Laukhards, *vorzeiten Magisters der Philosophie, und jetzt Muskietiers unter dem von Thaddenschen Regiment zu Halle, Leben und Schicksale, von ihm selbst beschrieben, und zur Warnung für Eltern und studierende Jünglinge herausgegeben. Ein Beitrag zur Charakteristik der Universitäten in Deutschland. Erster Theil, Zweiter Theil*, Halle 1792. (F・C・ラウクハルト『ゲーテ時代のひとつの断面——自伝「人生の有為転変」』上西川原章訳、三修社、1994 年。以下、原著は *Leben und Schicksale*、訳本は『断面』と略記)、Ders., *Magisters der Philosophie, und jetzt Lehrers der älteren und neueren Sprachen auf der Universität zu Halle, Leben und Schicksale, von ihm selbst beschrieben, Dritter Theil, welcher dessen Begebenheiten, Erfahrungen und Bemerkungen während des Feldzugs gegen Frankreich von Anfang bis zur Blokade von Landau enthält*, Leipzig 1796, Vierten Theils erste Abtheilung, zweite Abtheilung, *welche die Fortsetzung von dessen Begebenheiten...*, Leipzig 1797. (F・C・ラウクハルト『ドイツ人の見たフランス革命——一従軍兵士の手記』上西川原章訳、白水社、1992 年。以下『革命』と略記)。以下の引用では、都合により筆者が訳を一部変更した箇所があることをあらかじめ断っておきたい。また引用文中にある [ ] も筆者による便宜上の補足である。

<sup>(2)</sup> 上西川原章「F・C・ラウクハルト覚え書——18 世紀後半の一知識人＝兵士の自伝的記録について」『熊本大学教養部紀要 外国語・外国文学編』23 号、1988 年、282 頁。

判や忌避にさらされたとしてもやむを得ないのだが、ただそれにしても手厳しい評価である。そして驚くことにこの状況は、近年のドイツの研究書を見ても、どうやらほとんど変わっていないようなのである<sup>(3)</sup>。

このように、文学史上の評価は必ずしも芳しくないラウクハルトだが、こと軍事史の立場から見ると、その評価はまったく異なるといわざるをえない。彼の作品は歴史の証言として宝の山なのである。というのも、そこには当時のプロイセン軍に関する記述が数多く見られる——情報量は、ラウクハルトの方が後述のブレーカーをはるかに凌駕する——だけでなく、学者でもあった彼の著述は——後段で多々引用する彼の文章から明らかなように——、対象との距離の取り方や観察眼、洞察といった点で秀でてもいるからである。ラウクハルトの描く対象が「それ自体の重みをもって存在している」との指摘は、まことに正鵠を得たものといえよう<sup>(4)</sup>。つまりラウクハルトの著作は、質量ともにすぐれた軍事史の第一級史料と言うべきもののなのである<sup>(5)</sup>。

18世紀のプロイセン軍について末端兵士が残した記録としては、スイス人兵士ブレーカーのものが有名である<sup>(6)</sup>。近年のわが国では、このブレーカーの記録から当時の兵士の日常生活を再構成する研究も現れており<sup>(7)</sup>、彼の証言はいわば、近世プロイセン軍研究のスタンダード史料としての地位を確立している。これに対してラウクハルトの記録を本格的に扱う研究は、実のところいまだに存在しない。宝の山をこのまま死蔵させてはならな

<sup>(3)</sup> Guido Naschert, Friedrich Christian Laukhart — Schriftsteller, Radikalaufklärer und gelehrter Soldat, in : Ders. (hrsg.), *Friedrich Christian Laukhart (1757–1822)*, Paderborn 2017, S. 9.

<sup>(4)</sup> 上西川原「ラウクハルト覚え書」282頁。

<sup>(5)</sup> カトリック教会ないし啓示宗教に対するラウクハルトの敵意があまりに露骨なため、その偏りが証言の信憑性を損なうと考える向きもあろう。しかし筆者はそう考えない。たしかに彼のカトリック教会批判と、さらに革命フランスに対する擁護的立場は、後世の筆者ですら時として首をかしげたくなるほど強力なのであるが、だからといって彼は、革命理念に頭からつま先までどっぷり漬かった共和主義者ではない。なぜならラウクハルトは、デッサウ、バーデン、そしてプロイセンの啓蒙絶対主義を称え、それらの国々の君主を高く評価するからである。この態度は革命戦争従軍の前も後も変わらない。従軍前（1790年）にはデッサウ侯国を「公正なる君侯の治める国を旅するのは実にすばらしい」（『断面』303頁）と述べ、従軍後（1795年）もまた、バーデンでは「辺境伯が臣下を愛しその繁栄に心をつか」うため「君主の統治に満足して何の変更も望まれない」（『革命』146頁）というのである。プロイセンに対しても同様で、言論の自由を他国以上に許容するこの国の政治を高く評価する。ただしその一方で、後述のように、構造的欠陥を抱えるプロイセン軍の病院施設には厳しい批判を貫いた。これらのことから筆者は、ラウクハルトの立場を急進派啓蒙の是々非々主義と捉えており、彼の言葉には相応の客観性を認めることができると考えている。

<sup>(6)</sup> Ulrich Bräker, *Lebensgeschichte und natürliche Ebenteuer des Armen Mannes im Töckenburg* (1789), Philipp Reclam Jun., Stuttgart 1965. (U・ブレーカー『スイス傭兵ブレーカーの自伝』阪口修平・鈴木直志訳、刀水書房、2000年、以下『自伝』と略記)。

<sup>(7)</sup> 阪口修平「近世プロイセン常備軍における兵士の日常生活——U・ブレーカーの『自伝』を中心に」同編『歴史と軍隊——軍事史の新しい地平』創元社、2010年。また、19世紀前半のプロイセン軍を対象としたものではあるが、ハックレンダーという兵士の著作に基づく軍隊研究として、丸嶋宏太「国民国家の黎明期（19世紀前半）の兵営生活の一断面——プロイセン軍志願兵F・W・ハックレンダーの回想記から」『ゲシヒテ』第9号、2015年がある。

いであろう。それではいったい、ラウクハルトは当時のプロイセン軍をどのように描いたのだろうか。彼の軍隊経験は、同じく末端兵士であったブレーカーのそれと比べて、どのような特徴があるのだろうか。また両者を比較考察することで、近世常備軍ないしプロイセン軍の特質をどれほど炙り出せるであろうか。本稿で取り組むのはこれらの問いに他ならない。この作業はきっと、もっぱらブレーカーを基に創られた近世プロイセン軍の歴史像に一石を投じることになるだろう。

本論に入る前に、ここでラウクハルトの経歴を簡単に確認しておこう。彼は1757年にルター派牧師の息子として、プファルツのヴェンデルスハイム村で生まれた。1774年から78年までギーセン大学で、そしてもう一年ゲッティンゲン大学で学び、その後牧師ないし教師の職を得かけたものの成就できず、結局彼は、父のかつての学友でハレ大学神学教授のゼムラーを頼って1781年にハレへ向かった。ゼムラーの斡旋により、彼は فرانケの孤児院附属学校の教師となり、そのかたわらで研究に励んだ。翌年にはハレ大学で講義を行うようになり、これに必要なマギスターの学位と大学教授資格をも取得した。しかし借金苦に陥り追い詰められたラウクハルトは、心の安息を求めてハレ駐屯連隊（歩兵第三連隊）の兵士へと身を落としてしまう。1783年末、彼が26歳の時のことであった。

1792年にフランス革命戦争が始まると、ラウクハルトもこの侵攻に従軍した。彼はあのヴァルミーの戦い（同年9月20日）も経験している。93年9月にはランダウ要塞を開城させるための密使となり、その後脱走兵を装って長くフランスに潜入した。リヨンではサンキュロットにまでなっている。ラウクハルトは1795年10月にハレへ戻るが、それからの後半生はまったくの鳴かず飛ばずに終わった。1804年から11年まではフランス領となったザール県ファイツロートで牧師を務めた。その後、各地をさまよった末、彼は生まれ故郷に近いバート＝クロイツナハで1822年に世を去っている。

## 1. ラウクハルトの駐屯生活

1783年末に入隊したラウクハルトは、フランス革命戦争で出征するまでの十年ほどの期間を駐屯地のハレで生活を送った。彼の駐屯生活はどのようなものだったのだろうか。ブレーカーは約四半世紀前のベルリンで駐屯生活を送ったが、その印象とラウクハルトのそれとはどれほど異なっていたのだろうか。以下ではこの点について考察してみよう。

## (1) 入隊の動機

前述のように、ラウクハルトが兵士になった動機は基本的には借金苦である。この借金は「イエーナへの旅、戯れの恋、二度の討論、小説『バルドリアン』の原稿料の損失、あれこれの腹立ちを気晴らしによって鎮めるための出費、ならびに自分の持っているものを誰にでも喜んで分かち与えるお人好しぶり」などによってもたらされたものであった<sup>(8)</sup>。加えてハレ大学では講義の無料化競争が慣例化しており、講義室を暖める薪すら調達できないラウクハルトは聴講者をますます失っていた。借金から逃れるため、彼はプファルツの父に無心するが、それは父と同居する弟の裏切りと讒言——その真偽は分からないが、少なくともラウクハルトはそう受け止め、激しい怒りと復讐心に燃えた——により妨げられてしまう。こうして彼は金銭的にも精神的にも追い詰められる。そして、その時彼の脳裏をよぎったものこそ、安酒場で驚くほど陽気に飲み歌うプロイセン兵士たちの姿であった。

昨日のあのしがいない職人や兵士らの陽気さがまず最初に念頭に浮かんで来た。そういうわけで例の考えが思い惑いごった返す想念の中からひと際高く浮かび上がった。お前が兵士になるなんてなかなか結構じゃないか、と。この考えは初めはもちろん私を激しく動揺させたが、しかし何度も繰り返し現れるうちに遂に私はそれに親しみを覚えるようになった。…私は考えた、お前が兵士になるとハレのうるさい債権者共を一挙に厄介払いできる。それからお前の弟や父に対する仕返しにもなるのだ…、これで疑いなくお前はやつとより安らかな生活を手に入れる手段を見つけたのだ。どんな種類の安息であろうと、どんな犠牲を伴うものであろうと、一向に納まりそうにない不安の中を漂う私には、安息は当時この世で最高の宝物であるように思われた<sup>(9)</sup>。

ラウクハルトの入隊を考える際にとりわけ重要なのは、彼が志願してプロイセン軍に入ったという事実である。この点で、募兵将校の従者のつもりでベルリンに入った瞬間、不本意にも兵士にさせられてしまったブレーカーとは、まるで異なっている。当時の線型戦術では兵士の多寡が勝敗を左右する要因になりえたため、プロイセン軍に限らず、戦時には強制徴募（物理的な強制だけでなく、詐欺や奸計を用いた徴募も含む）が各国で続発した。ブレーカーもまた七年戦争直前の強制徴募による不本意入隊者であり、たしかにその意味では典型的な兵士といえよう。しかしながら、彼の事例を一般化してその他の入隊

<sup>(8)</sup> Leben und Schicksale, Bd. II, S. 228. 『断面』236頁。

<sup>(9)</sup> Ebd., S. 232f. 『断面』242頁。

者まで説明することはできないし、そうしてはならない。平時の志願入隊者についてはやはり、R・プレーヴェが呈示した三類型が妥当と思われる。すなわち① 冒険心や兵士生活への好奇心から入隊する者、② 家計の行き詰まりや世間のしがらみから逃れるために志願する者、③ 軍隊に経済的安定を求める下層民である<sup>(10)</sup>。総じて見た場合、近世常備軍の平時の兵員は③によって大多数が供給されていたと考えられるが<sup>(11)</sup>、ラウクハルトの場合はまさしく②のパターンに該当する入隊であった。

また、志願入隊者と不本意入隊者では勤務へのモチベーションが格段に異なるため、両者は脱走という誘惑に対する心構えも当然違っていた。この点について、従軍直後の戦いで早々に脱走したブレーカーと、名目上の脱走兵になったとはいえ、基本的にはプロイセン軍に留まり続けたラウクハルトの違いは示唆的であるといえよう。

## (2) 教練・査閲・教会行進

入隊したラウクハルトを待っていたのは、プロイセン軍の猛烈に厳しい新兵教練であった。彼によれば「厳しい打擲こそ最良の教練教官であるという原則」は、この当時もおおだいに妥当していたようである。ただラウクハルト自身に対しては、ハレ大学の講師という前歴も手伝ってか、幸いなことに「この原則は私には適用されたことがなく、またこれまでどの士官も私を打擲すると脅したり、まして打擲したり、またさせたりしたこともなかった」<sup>(12)</sup>。それゆえ彼は「中隊のその他の主だった者たちもつねづね私によくしてくれ」たと、感謝の念を持って当時を振り返るのである。教練、特にプロイセンのそれは、ブレーカーの体験記が広く流布したこともあって、ネガティブなイメージがひたすら助長されてきたが<sup>(13)</sup>、これとはかなり異なる経験者がいたことに注意を促しておきたい。もちろん入隊者のほとんどは、ラウクハルトのような幸運には恵まれなかったであろう。幸運な兵士が彼以外にいたとしても、それはごく僅かだったにちがいない。しかし、だからといって新兵全員がブレーカーと同じ印象を抱いていたと考える必要もなかろう。激しい打擲を伴おうとも、やはり大半の新兵、とりわけ志願兵は、教練内容を習得して兵士であり続けた

<sup>(10)</sup> Ralf Prüve, Zum Verhältnis von Militär und Gesellschaft im Spiegel gewaltsamer Rekrutierungen (1648-1789), in: *Zeitschrift für historische Forschung*, Bd. 22, 1995, S. 204f.

<sup>(11)</sup> 鈴木直志『ヨーロッパの傭兵』山川出版社、2003年、77頁以下を参照のこと。

<sup>(12)</sup> *Leben und Schicksale*, Bd. II, S. 272. 『断面』260頁。

<sup>(13)</sup> ブレーカーによる新兵教練の描写は次のごとくである。「ほんの些細なことが理由で他の仲間が無慈悲に扱われ、われわれも含めて年がら年中いじめられているのを見ると、胸が痛んで仕方がなかった。ネジで締められたかのように軍服で締め付けられて、そのまま五時間もずっと立たされたり、棒のようにまっすぐになって縦横に行進させられたり、休むことなく稲妻のように迅速に武具を操作させられたのだ。すべては将校の命令一下だった。彼は狂暴な顔をして、杖を持ち上げたままわれわれの前に立ち、馬鹿みたいにならなくても殴りかかろうとするのである」。『自伝』117頁。

のである。1792年の歩兵第三連隊における兵士の平均勤務年数は11年であったが、この数値は、そうした事情を反映したものと解釈できるかもしれない<sup>(14)</sup>。

フリードリヒ大王時代のプロイセン軍には、毎年二カ月ほどの教練期（Exerzierzeit）があり、この期間は連隊総員が週五回、野外で教練を受けた。ラウクハルトによれば「初めての教練期は私にもどの兵士にも辛いもの」だったが、「しかしながらそれに耐えると、その後の教練期はだんだん楽になった」<sup>(15)</sup>。厳しい教練とはいえ、やはり要領さえ習得できれば、兵士はその後ある程度の余裕を持ってこれに対処できたことがここからも伺える。教練期には閲兵式も行われた。ラウクハルトが記述するのは、彼にとって初めての教練期の際に行われた閲兵式（1784年5月）についてである。マクデブルク近郊で実施されたこの閲兵式は、彼にとって初めてフリードリヒ大王を見る機会となっただけでなく、「まさにお祭り」で「事の目新しさや対象の変化のおかげでいっさいの労苦を忘れ」る体験だったという<sup>(16)</sup>。

プロイセンの歩兵隊規定では、日曜祝日と贖罪（祈祷）日に教会行進（Kirchenparade）という礼拝行事を定めているが<sup>(17)</sup>、ラウクハルトもこれについて言及している。それによれば、教会行進に際して「多くの兵士は今なお教会に行くのを重視しているので、いつも大勢の兵士が教会に入る」。この礼拝の利点は「特に服装に注意が向けられるので、兵士に清潔できちんとした服装を忘れないように仕向けられる」ことだと言うものの、彼にとってやはりこの行事は、信教の自由の国プロイセンにあるまじき礼拝の強制として受け止められた。それゆえこの教会行進に対しては、きわめて批判的な言葉が目立つ<sup>(18)</sup>。しかしこれが兵士の義務である以上、行わないわけにはいかない。そこでラウクハルトは、「時にぶらぶら散歩に出かけ」たり、あるいは礼拝の最中に「ひどく俗で下種な本を読んでやり過ごす」など<sup>(19)</sup>、消極的な抵抗をしたのであった。

<sup>(14)</sup> 鈴木直志「連隊簿からみた近世プロイセン軍隊社会（上）——1792年の歩兵第三連隊の事例」『中央大学文学部紀要』（史学）第62号、2017年、147頁。なおプレーカー自身も、軍務契約で定められた契約期間の「6年間なら、まだ耐えられないこともない」（『自伝』119頁）と述べている。

<sup>(15)</sup> Leben und Schicksale, Bd. II, S. 274f. 『断面』261頁。

<sup>(16)</sup> Ebd., S. 276f. 『断面』262頁。

<sup>(17)</sup> Reglement für die königl. preußische Infanterie, worinn enthalten: Die Evolutionen, das Manual, die Charge, und wie der Dienst im Felde, und in der Garnison geschehen soll..., 1785, S. 311ff.

<sup>(18)</sup> 「[教会に] 入りたくない者には絶対に入ることを強制すべきではなかろう。最も正統派的なキリスト教の考え方からしても、人に礼拝に行く…ことを強制したり、それを怠ると罰するというのは気違いじみた考えである。…プロイセンのような国では当然その類のこと [= 教会による強制] は聞かれないはずである。それ故私たちの所に今なおこういう教会強制があることに、私は驚き入っている次第だ。いや、私が教会を訪れなければならなかった時ほど侮辱され激しい怒りを感じたことはなかった」。Leben und Schicksale, Bd. II, S. 367. 『断面』287頁以下。

<sup>(19)</sup> Ebd., S. 368. 『断面』288頁。

### (3) 賜暇と副業

プロイセン軍では、毎年教練期の二カ月は将兵全員に軍事訓練が課せられたが、それ以外の十カ月は、ほとんどの兵士に休暇が与えられていた。農村で徴集された同国人（いわゆるカントン兵）の場合、この休暇期間は帰郷して農作業に従事した。また、都市の駐屯地に残る兵士に対しても、歩哨（衛兵）に最低限必要な人員を除き休暇が与えられた。休暇兵は非番兵（Freiwächter）と呼ばれる。このような賜暇制度の目的は、一定の練度を持つ将兵を確保する一方、可能な限り多くの兵士に休暇を与えて担税力を維持し、なおかつ軍の維持費を極限まで切り詰めることであった。フランスやオーストリアほどの国力を持たない中規模国プロイセンならではの知恵である。

さてラウクハルトもまた、閲兵式から戻った 1784 年 5 月以降、さっそく非番兵になっている。ただし、外国人兵士である彼は、原則的に駐屯都市の外に出ることを許されていない<sup>(20)</sup>。そのため彼は賜暇のことを「都市内休暇（Stadturlaub）」と呼ぶのだが、歩哨勤務をしない代わりに給料がもらえず、都市の中で副業をして生計を立てていた<sup>(21)</sup>。まさしく非番兵である。

外国人兵士が都市外で賜暇を得る場合には保証金を必要とした。ラウクハルトはこれも経験している。プファルツに住む父を訪ねる際、賜暇の保証金として、彼の父が 150 ターラーを支払ったのである<sup>(22)</sup>。息子の社会的下降を嘆いた父は、ここまでして兵士をやめさせようとしたわけだが、その希望が叶うことはなかった。ラウクハルトが帰郷を終えてハレに戻ると、やがて弟の譏言で保証金が引き揚げられてしまう。これにより、ラウクハルトの市門通行証は取り上げられ、彼の日常生活は再び「ハレの周壁の内側だけで甘んじなければならなかった」のであった<sup>(23)</sup>。

非番兵のラウクハルトは教会行進の時しか中隊には行かなかったので、日曜以外に軍務

<sup>(20)</sup> 18 世紀後半のプロイセン軍では、名目的には約半分、実質的には約三分の一の兵士が外国から供給された。純粋な国外出身者だけでなく、いくつかの条件に該当する同国人もまた「外国人」と見なされていたからである。また国外出身兵士のうち、他のヨーロッパ諸国の者は比較的稀で、大半は（プファルツ出身のラウクハルトのように）神聖ローマ帝国の他領邦から来ていた。鈴木「連隊簿」150 頁以下。

<sup>(21)</sup> 「私は閲兵式から帰ると〈都市内賜暇〉を取った。つまり私は給与を中隊長に渡し、衛兵勤務をしない、従って私の個人教授をもっと秩序だてて都合よくそれに専念できるというわけだ。しかし他方では学生からの稼ぎで暮らせるように授業を案配せざるをえなかったが、これはかなり物価の高いハレのような町で、それも学生だけを頼りにする暮らし方なのでいささか難しい面がある」。Ebd., S. 278f.『断面』262 頁。

<sup>(22)</sup> Ebd., S. 300.『断面』268 頁。もとより、外国人兵士がこうした保証金を支払って都市外で賜暇を得る例は他になかったであろう。そもそも——いわば身代金ともいうべき——150 ターラーという金額は、大多数が下層民出身である兵士には用意できない高額であったと思われる。またラウクハルトの記述によれば、賜暇の許可を得る際には駐屯都市に連帯保証人も必要であった。

<sup>(23)</sup> Ebd., S. 382.『断面』294 頁。

はまったくなく、ハレの市内で生計のための副業に勤しんだ。彼の選んだ副業は、語学授業の個人教授であった。彼は「すでに閱兵式前に学生数名にラテン語とフランス語を教えて」おり、「最初の受講者はマルク地方出身のザルピウス氏、今はベルリン在の医学博士ベーム氏、それにヴェストファーレン出身のガッセル氏だった」と述べている<sup>(24)</sup>。またこれらの一般学生以外に、中隊長ミュフリンクの依頼で、彼の長男にフランス語の家庭教師もしている<sup>(25)</sup>。個人教授の実入りは必ずしも芳しくはなかったようだが、「たとえ十分な報酬はもらえなくてもある程度暮らしていけるだけのものは手に入った」とのことである<sup>(26)</sup>。

#### (4) 宿営

兵舎がまだ未発達だった近世の軍隊では、都市民の住居に兵士が住み込む宿営という住形式が一般的であった<sup>(27)</sup>。ラウクハルトによると、当時マクデブルクではそうした宿営が行われていたが、彼の駐屯するハレは異なっていたという。すなわちハレでは、妻帯兵士の世帯が「独身兵士二名を下宿させ、薪、蠟燭、ベッドを与えて、国家からその手当てつまり宿舎料をもらって」いたのである。宿主側は、安く住居を借りればその分多くの差額を自分たちの懐に入れられるため、「その結果劣悪な住居を借り、…おのずと種々の不都合を生じ」させていた<sup>(28)</sup>。ラウクハルトは入隊当初、トラウトヴィヒという若い同僚兵士とともに下士官ツツツェル夫婦のもとに下宿した。その際、中隊長から「ツツツェルはおかしな男で彼の妻はまるでサタンの申し子」ゆえやめた方がよいと忠告があったが<sup>(29)</sup>、これに逆らったラウクハルトはやがてその正しさを思い知らされ、さんざん不愉快な思いをしたあげく、早々に下宿先の変更を余儀なくされたのであった。彼はその後、確認できる限りでミュラー宅（1783年）、コルバハ宅（1786年）、グルーネベルク曹長宅（1787年）

<sup>(24)</sup> Ebd., S. 278. 『断面』 262 頁。

<sup>(25)</sup> この長男こそ、1821年に陸軍参謀総長職が創設された際、これに就任したフリードリヒ・カール・フォン・ミュフリンク（Philipp Friedrich Carl Ferdinand Freiherr von Müffling genannt Weiß 1775-1851）である。この参謀総長ミュフリンクについては、W・ゲルリッツ『ドイツ参謀本部興亡史』守屋純訳、学習研究社、2000年、上巻92頁以下、ならびに渡部昇一『ドイツ参謀本部』中公文庫、1986年（初版1974年）、118頁以下に言及があるので、そちらを参照をされたい。

<sup>(26)</sup> Leben und Schicksale, Bd. II, S. 472. 『断面』 323 頁。

<sup>(27)</sup> 宿営に関しては、Ralf Pröve, Der Soldat in der ‚guten Bürgerstube‘: Das frühneuzeitliche Einquartierungssystem und die sozioökonomischen Folgen, in: B.R. Kroener/R. Pröve (hrsg.), *Krieg und Frieden. Militär und Gesellschaft in der frühen Neuzeit*, Paderborn 1996 (wieder in: Ders., *Lebenswelten. Militärische Milieus in der Neuzeit. Gesammelte Abhandlungen*, Berlin 2010) ならびに鈴木直志『広義の軍事史と近世ドイツ』彩流社、2014年、52頁以下を参照のこと。

<sup>(28)</sup> Leben und Schicksale, Bd. II, S. 248. 『断面』 359 頁。当然のことながら、この規定を裏返すと、結婚すれば宿営しなくてもよいことになる。実際、1786年の春にラウクハルトは「他人の所に宿所をもつのがつくづく嫌になり、あっさりと兵隊仲間の多くと同じように結婚し、独立して暮らすことに決め」ている（同270頁）。しかしこの時見初めた女性の素性は——中隊長ミュフリンクが忠告していたように——娼婦だったことが発覚し、彼は結婚を断念している。

<sup>(29)</sup> Ebd., S. 247. 『断面』 250 頁。

と居を移している。宿営では宿主と兵士の間のトラブルがしばしば注目されるが、ラウクハルトの記録を見る限り、ツッツェル以外宿主とのトラブルはない。それどころか、最後の宿主であるグルーネベルク曹長は「実によい人で、今日 [1792 年] に至るまでも私はそこにいる」と述べるように、ラウクハルトは五年にわたってこの下士官世帯とうまく折り合って生活していた<sup>(30)</sup>。

## (5) 刑罰

入営して間もない頃のラウクハルトは、それまでの無軌道な生活スタイルをすぐに改めることができず、二度ほど営倉罰を受けたと記している。いずれも門限違反がその理由である。具体的な記述がある一度目の場合、靴職人だったボルンマイスターという同僚兵士に誘われ、ラウクハルトは門限の八時を過ぎてもなお居酒屋談義を続けたのであった。こうして「私があまりにも長時間外出したままであるのに気付いた下士官たちは、私とボルンマイスターを尋ねて通りから通りへ飲屋という飲屋を捜し回った。ようやく私たちのいる<sup>あなぐら</sup>筈に辿りつき、私たちを引っ張って帰った」のである。彼らは翌日、中隊長にきつく叱責された後、営倉に入れられ、そこで曲げ結び (Krummschließen) と呼ばれる刑罰を受けた。それは「一二時間手足を縛られ背筋を伸ばせぬまま」にするというもので、「窮屈な姿勢で横になると、これはもう不快極まることで、それにものすごく恥ずかしい思いをさせられ」たのであった<sup>(31)</sup>。

兵士の刑罰について、ラウクハルトは非常に興味深い指摘をしている。上述の営倉罰から翌朝放免された彼は「いくらか経たぬうちに早々にこの事件そのものを忘れてしまったが、それは仲間たちから、窃盗の場合は別にして、兵士にとって処罰など何ら不名誉なことではないと教え込まれたせいだった」。というのも、彼によれば「処罰自体は兵士の名誉を汚すものではなく、問題は処罰の理由」だったからだという。窃盗の場合には、たとえ処罰が軽くても兵士は名誉を失うけれども、他方で大酒飲みや殴り合い、職務怠慢といった違反は、程度がひどくても不名誉には数えられないというのである<sup>(32)</sup>。この指摘は、すでに当時から甚だ非人道的で残酷な刑罰として知られていた二列答刑が、それ自体として

<sup>(30)</sup> Ebd., S. 362. 『断面』 287 頁。ちなみに、ミュラー宅からラウクハルトが離れるきっかけになったのは、彼のプファルツへの一時的な帰郷であり、コルバハ宅から離れたのは、連隊の改編によりラウクハルトの配属が変更になったからであった。

<sup>(31)</sup> Ebd., S. 263ff. 『断面』 258 頁。曲げ結びとは、右手と左足、左手と右足を結んで縛り付ける刑罰であった。それゆえラウクハルトは背筋を伸ばせず、窮屈な姿勢となり、恥ずかしい思いをしたのである。なおこの刑罰については、阪口修平「社会的規律化と軍隊」『シリーズ世界史への問い 5 規範と統合』岩波書店、1990 年、238 頁ならびに丸島「国民国家黎明期」32 頁に言及がある。

<sup>(32)</sup> Ebd., S. 265f. 『断面』 258 頁。

は違反者の名誉を傷つけるものではなかったことを想起させる<sup>(33)</sup>。いずれにしても当時の軍隊には、ラウクハルトが「この身分の独自のモラル」と呼ぶような固有の名誉観が、刑罰とは無関係に存在したのであって、このことは注目に値しよう<sup>(34)</sup>。

## 2. プロイセンの軍人たち

ラウクハルトの記録には、具体的な個人を語る場合であれ、集団の状態や行動を観察する場合であれ、プロイセン軍の将兵に関するものが数多くある。彼の冷静な観察と鋭い洞察には驚かされることも多く、それらは十分に考察に値する。ここでは、将校および下士官・兵士の順に彼の証言をまとめてみよう。

### (1) 将校

将校については何よりも、フランス革命軍と対比しながら示される次の指摘が、プロイセン将校の重要な特徴を的確に言い当てているように思われる。

今でもよく覚えていることだが、プロイセン軍にあつてはいい将校と悪い将校との間にはとてつもない相違があるのに対して、フランスではこんな相違はとうてい考えられない。ここでは恣意など起こりえないし、何につけても法が支配し決定する。…法の下では将校は志願兵と異なるところがない。法の定めることを両者共当然の義務と認めているし、それを越えて恣意の働く余地はない。それゆえフランスの兵士たちは自分を指揮する将校がイーゼグリムか天使かを気にしない<sup>(35)</sup>。

プロイセン軍では、よい将校と悪い将校との間にとてつもない格差があるというのである。ラウクハルトの理屈に従えば、この格差は身分差が一掃され法の支配が貫徹すれば消滅することになるが、その当否はともかくとして、彼のプロイセン将校についての著述に

<sup>(33)</sup> 阪口「社会的規律化」238頁。二列管刑については、プレーカーの次の証言がその内容をよく伝えており、有名である。「二百人の兵士が二列になってつくる長い小道を、脱走兵が笞で打たれながら八回も行ったり来たりして、息も絶え絶えになって倒れるまでの一部始終を、われわれは傍観せねばならなかった。翌日もまた連れ出された。打ちのめされた背中から、彼らの服はズタズタに引き裂かれ、そのぼろ服にしみ出た血がズボンの上に滴り落ちるまで、改めて笞打たれた」。『自伝』116-7頁。

<sup>(34)</sup> Leben und Schicksale, Bd. II, S. 266. 『断面』258頁。なお、藤田幸一郎氏によれば、前近代のドイツで所有権の侵害が生じた場合、「公然たる『略奪』 Raub は『名誉事件』、ひそかな『窃盗』 Diebstahl は卑劣な『不名誉事件』とされ」たという（藤田幸一郎『手工業者の名誉と遍歴商人』未来社、1994年、48頁）。兵士の名誉観・不名誉観もひょっとするとこれと関連するかもしれない。

<sup>(35)</sup> Leben und Schicksale, Bd. III, S. 526. 『革命』170頁。

は善悪いずれのタイプも見られる。まずは自分本位で、かなり乱暴な将校の事例を挙げてみよう。ヴァルミーへ向かう途中、ひどく喉の渴いたあるプロイセン将校は、戸口にいたフランス女性に飲み水を求めるが、水がないという返事を聞くや怒鳴り、杖で血が吹きだすほど彼女の顔を殴ったというのである<sup>(36)</sup>。この事例以外にも、従卒がフランス農民から掠奪した馬を安値で買い取って横領した将校や<sup>(37)</sup>、兵士全員へ分配する予定だった靴下を着服・売却して私腹を肥やした将校について<sup>(38)</sup>、ラウクハルトは伝えている。

他方、兵士思いの善良な将校もいた。ヴァルミーからの退却時、悪路と強行軍で落伍兵が続出した時のことである。「自分の体をひきずって歩くのが精一杯で、…武器を投げ棄て…飢えと寒さ、雨、疫病のために疲労困憊した」兵士たちに出会おうと、国王自身が「銃を棄てるように勧め、そのうちにまた別のを調達してやるからと言ひ添え」、「まだ胸中に人間らしさの残っている將軍や将校」もこれと同じことを助言したのである<sup>(39)</sup>。興味深いことに、ラウクハルトの作品全体を通して見た場合、このように情け深く公正なタイプの将校の方が、強圧的で悪辣な将校よりも言及が多い印象を受ける。総じて威圧的な将校像を伝えるブレーカーとは、ここでもかなり異なっている<sup>(40)</sup>。その理由はおそらく、啓蒙の知識人であったラウクハルトに興味を示し、彼を兵士というよりむしろ同志のように接する「教養ある将校」がプロイセン軍に一定数存在し<sup>(41)</sup>、ラウクハルトがこれに多くの紙幅を割いたからであろう。こうした将校のうち、中でもヨーハン・フリードリヒ・ヴィルヘルム・フォン・ミュフリンク（Johann Friedrich Wilhelm von Müffling: 1742-1808）は、ラウクハルトの身近な人物で、彼がことさら多くを語った将校であるため、ここで取り上げないわけにはゆかない<sup>(42)</sup>。

<sup>(36)</sup> Ebd., S. 130. 『革命』 61 頁。

<sup>(37)</sup> Ebd., S. 111f. 『革命』 54 頁。

<sup>(38)</sup> Ebd., S. 128f. 『革命』 60 頁。

<sup>(39)</sup> Ebd., S. 191f. 『革命』 83 頁。ちなみに、ラウクハルトはこの文章の中でプロイセン国王フリードリヒ・ヴィルヘルム 2 世を慈悲深い善良な国王として描いているが、将兵を思いやる国王の行為を伝える文章は他にも数カ所ある。ラウクハルトのこの国王評価は偽りではないと思われる。

<sup>(40)</sup> ブレーカーによる威圧的な将校像は、「少佐」と呼ばれる将校と彼との次の会話に端的に表れている。「[「なんとも」と彼「少佐」は私の言葉を遮った。「なんとも貴様は、純情なやつだな!…要するにだ。貴様は国王にお仕えせねばならないのだ。それでおしまいだ」。私:「しかし、少佐どの…」彼:「黙れ! それとも痛い目にあいたいのか!」…私:「お…お…お願いします…」彼:「馬鹿野郎! とつとと失せろ」。——と同時に彼はサーベルを引き抜いた」。『自伝』 107 頁以下。

<sup>(41)</sup> 「教養ある将校」については、鈴木『広義の軍事史』 145 頁以下を参照のこと。

<sup>(42)</sup> ミュフリンク以外にラウクハルトが多くを語った将校として、もう一人ブラウンシュヴァイク＝ヴォルフエンビュッテル＝エルス公フリードリヒ・アウグスト（Friedrich August Braunschweig-Wolfenbüttel-Oels: 1740-1805）がいる。フリードリヒ・アウグストは、かのブラウンシュヴァイク宣言で有名なブラウンシュヴァイク公カール・ヴィルヘルム・フェルディナント（Karl Wilhelm Ferdinand Braunschweig-Wolfenbüttel）の弟で、フリードリヒ大王の甥でもある。1790 年のシュレージエン出兵の際、プロイセン軍の総司令官を務めたのがこのフリードリヒ・アウグストであった。出兵時の会食の際、雑談でラウクハルトのことを知った公は、ある朝——ラウクハルトを呼び寄せ

ミュフリンクは、1783 年末のラウクハルトの入営から 1787 年の中隊改編までの三年あまりのあいだ、彼の中隊長だった人物である。初対面は入隊の申込みの時で、その際「ひじょうに好意的」に接したミュフリンクについて、ラウクハルトは「この人の腹藏ない態度がすぐ気に入った」そうである。その後二人は——入隊に関する諸条件の話題も交えながら——ミュフリンクが机に置いていたポリュビオスのドイツ語訳をきっかけにして、しばらく古代人の戦法について議論したという<sup>(43)</sup>。将校と兵士志願者というよりも、啓蒙の知識人同士による屈託のない会話がすでにこの一節から想起されよう。

二人の強い信頼関係はずっと変わらなかった。もちろん、ラウクハルトが軍律違反を犯した時には、中隊長のミュフリンクは「どれくらい譴責を加えた後で、私を営倉に入れさせた」けれども<sup>(44)</sup>、彼は入隊後のラウクハルトに対し何かと便宜を図っている。例えば、前述のようにミュフリンクは長男のフランス語の家庭教師をラウクハルトに託している。その際ミュフリンクは、いくらラウクハルトが拒絶しても、「正規の免許をもった大学の語学教師や講師と同額を払ってくれた」という。それだけではない。ラウクハルトが家庭教師の仕事を終えた後も、二人が中隊改編で別れる 1787 年までずっと、ミュフリンクは彼を家に自由に出入りさせていたのである<sup>(45)</sup>。ミュフリンクは人格者であった。「すべての中隊がこういう方を長とし、すべての子供がこういう親を持つことになればと願わずにはいられない」と最高級の賛辞を送るラウクハルトにとって、彼はプロイセン軍の善良な将校の代表だったにちがいない。中隊長と兵士の関係として彼らの関係を見た場合、もちろんそれはとうてい一般化しがたい例外的事例である。ただし視点を変えて、近世軍隊における中隊長の裁量の大きさに着目するなら、中隊長が特定の兵士を優遇する事例の一つとして見ることもできるかもしれない。

## (2) 下士官・兵士

新兵が軍隊での生活を身につけるにあたり、指導的な役割を果たしたのが下士官や古参兵である。ラウクハルトが入隊当初下士官ツツェルのところに下宿して指導を受け、かなりひどい目に遭ったことについてはすでに述べた。興味深いことに、将校のミュフリン

---

るのではなく——自ら直接この一兵卒に会いに行き、知的な会話をして楽しんだ。この一件に感激したラウクハルトは、出兵中の宿営時に自伝的著作の『人生の有為転変』を書き上げ、公に謹呈したのである。それゆえラウクハルトは、このブラウンシュヴァイク公に対しては「人間愛に満ちたフリードリヒ公」、「この最高の君候」と賛辞を惜しまない。Leben und Schicksale, Bd. II, S. 452ff. 『断面』317 頁以下。

<sup>(43)</sup> Leben und Schicksale, Bd. II, S. 237. 『断面』245 頁。

<sup>(44)</sup> Ebd., S. 265. 『断面』258 頁。

<sup>(45)</sup> Ebd., S. 271f. 『断面』259 頁以下。

クやブラウンシュヴァイク公についてあれほど多弁だったラウクハルトが、下士官や同僚兵士についてとなると、このツッツェル以外、多くを語っていない。ブレーカーの場合には、同じ中隊の仲間であったシェーラーという同郷人が、軍隊生活を共にする親友としてしばしば登場したのだが<sup>(46)</sup>、ラウクハルトの場合には、これに相当する同僚兵士、もしくは下士官が見当たらないのである。それゆえ下士官と兵士については、特定の個人との交流に基づいた体験談というよりも、これらを集団として観察した彼の記録に即して、考察を行うことにする。

下士官について、ラウクハルトはプロイセンに限らず、どこの軍隊の下士官も「オリエンで女たちを監視する宦官と大いに似通った点がある」という。彼らは宦官と同様、上司に対して「一般の兵卒以上に限りなく従順に服従しなければならない」だけでなく、さらには「しばしば虐待されたり難題を負わされたりする」。それゆえ、その不満や鬱憤晴らしを「宦官が女たちに向けてるように兵士たちに向けてやろうとする」が、しかし「狡猾な兵卒らに愚弄されることも稀では」ない。それはちょうど「腹黒い宦官が陰謀好きの女たちに愚弄されるのと同じだ」というのである<sup>(47)</sup>。

兵士に関する記述は、下士官に比べてはるかに多い。ラウクハルトによれば、ハレの駐屯兵たちの気晴らしはもっぱら兵隊酒場で飲み歌うことだった。それは「まともな人びとの集まる所は兵士には閉されている」からで、兵士がそうした場所を遠慮すると兵隊酒場にならざるをえないのであった<sup>(48)</sup>。どうやら兵士と都市民の間には棲み分けがあるようである。売買春については「独身の兵士もほとんどの者が〈いい子〉を持っている」。彼らの相手をする娘たちは「大部分が最下層の出身で、暮らし振りは最悪、大体が兵士の娘」であるが、ラウクハルトによれば「兵士はこんな相手でもいっしょになれば大喜び」であった。なぜなら「動物的欲求の面倒を見てもらえる」だけでなく、まさかの時は「こういう女が自分の服を売ったり質に入れたりして」、相手の兵士の急場を救うこともあるからである。

兵士がこうした娼婦と結婚することも珍しくなかった。その結婚は「大抵が不幸で、大半が子供がいない。子供ができたとしても子供の教育を満足にできるはずがなく、国家にとって大して益するところがない」。ラウクハルトはこのように批判的判断を下すが、とはいえ結婚する兵士を悪く思っているわけではない。なぜなら「どんな相手だろうと女房

<sup>(46)</sup> 阪口「兵士の日常生活」143頁。

<sup>(47)</sup> *Leben und Schicksale*, Bd. II, S. 249. 『断面』251頁。

<sup>(48)</sup> *Ebd.*, S. 256. 『断面』254頁。

にもraitaidarouし、そうすればある程度まで彼は一家の主」だからである<sup>(49)</sup>。なお彼によると、皇帝軍やフランス軍などと比べ、プロイセン軍では「結婚許可証をもらうほど簡単なことはない」。そしてこの容易さにより「プロイセン兵士は、全体的に見ると、他国の兵士に比べてはるかに出征を好まない」。特に軍の半数以上を占めるカントン兵は、結婚によって「妻子との暮らしが彼らを家に縛りつけ、出征を厭わしいものにする」が、他方では妻子への愛情が「彼らを忠誠ならしめ、祖国に愛着心を抱かせ、彼らの逃亡を防いでいる」とラウクハルトは見ている<sup>(50)</sup>。誠に鋭い観察であるといえよう。

このカントン兵について、彼は非常に興味深い記述を残している。農村賜暇兵である彼らが教練期に駐屯地にやってくると、ラウクハルトは「反吐が出るほど不快になる」というのである。というのも「この連中は大半が農民、鋤夫、日雇い人夫で、父祖伝来の粗野で無骨な点ばかりか馬鹿ばかしい誇りや厚顔振りも並み大抵のものではないから、その付き合いはいきおい無粋」だからである。これに対して、ラウクハルトの同僚である都市内休暇兵たちはそうではない。彼ら「兵士の生活態度は、それを知らぬ者が想像するほど不作法でも野卑でもない」というのである。プロイセン軍兵士はたしかに、まだまだ「多くの点で多分フランス軍に劣っているとはいえ、彼らの中によく作法を弁えた者が多い」<sup>(51)</sup>。これがラウクハルトの見た兵士の姿であった。常備軍の兵士はすでに同時代から「大地の屑」や「ならず者」などと呼ばれ蔑視されたが<sup>(52)</sup>、兵士の世界に身を置いたラウクハルトは、そうした世評と兵士の実際の生活態度との間にズレを見たのである。

最後に、兵士たちのメンタリティーを伝えるラウクハルトの記述を見てみよう。プレーカーの描く兵士は総じて服従的で、抑鬱的な印象すら感じるが、ラウクハルトの記録には時として血の気の多い兵士が登場する。例えばシュレージエン出兵の際、兵士たちはライヒェンバハ会議の成り行きをめぐって意見を戦わせ、「しばしば激しくいがみ合って殴り合いになりそうだった」<sup>(53)</sup>。フランス侵攻時には、ヘッセンの居酒屋で兵士数名と市民数人の間で喧嘩が起こり、これまた殴り合い寸前になった。革命フランス支持を堂々と表明する市民に対して、兵士たちは「サーベルでテーブルを叩き」、さらに「ジョッキやグラスをいくつも割った」ので、市民たちがつかみかかったのである<sup>(54)</sup>。

<sup>(49)</sup> Ebd., S. 259f. 『断面』 256 頁。

<sup>(50)</sup> Ebd., S. 394f. 『断面』 301 頁。

<sup>(51)</sup> Ebd., S. 257. 『断面』 255 頁。

<sup>(52)</sup> A・バルベロー『近世ヨーロッパ軍事史——ルネサンスからナポレオンまで』西澤龍生監訳・石黒盛久訳、論創社、2014年、114頁。

<sup>(53)</sup> Leben und Schicksale, Bd. II, S. 『断面』 312 頁。

<sup>(54)</sup> Leben und Schicksale, Bd. III, 『革命』 28 頁。

革命戦争のマインツ要塞攻囲戦を記した部分で、ラウクハルトは、プロイセン軍兵士とフランス軍ドイツ兵が互いに罵り合う様子を会話体で記述している。ここでの前者の言葉は、当時のプロイセン兵士が革命をどう捉えていたかを伝えている。「忌まわしい愛国者め」、「呪われた王殺しめ」、「お前らの行く手には罰が待ってるぞ。全キリスト教徒がお前らを攻撃して、お前らの神を蔑する行為を罰しよう」、「だが国王のいない所には兵士もいるまい」といった言葉がそれである<sup>(55)</sup>。ラウクハルトはもう一つ、ヴァルミーの戦いで老下士官たちがしていたという会話を記録している。それは、王冠を戴いた国王は銀の弾でなければ死なず、しかも「プロイセンの国王たちは剣にも弾にも傷つけられないという特権」を持つという内容である<sup>(56)</sup>。知識人のラウクハルトは、荒唐無稽な迷信と見なしてこれに憤慨したが、当時の下士官・兵士層の素朴なメンタリティーを表すものとして、この事例は実に興味深い。18世紀末の兵士はなおきわめて信心深く、妖術や迷信の世界にもどっぷりと漬かっていたのである。

<sup>(55)</sup> Ebd., S. 380f. 『革命』132頁以下。

<sup>(56)</sup> この部分の叙述はきわめて興味深く、かつ情景を彷彿とさせるようなすぐれたものなので、長文になるが、以下に当該箇所の全文を転載しておきたい。

「ところで、わが国王が当地で將軍数名を伴って敵の砲弾の真っ只中に馬を進めるのを見て、私はこの勇気ある君主が兵士たちに示したりっぱな模範を大いに歓迎した。と同時に、二人の老下士官の以下のような愚劣極まりない会話に大いに憤慨したものだ。二人をA、Bと呼んでおく。

A 「あそこに〈おやじ [= 国王フリードリヒ・ヴィルヘルム2世]〉が見えるだろう」

B 「もちろん見えてるとも。見ろ、敵の弾が彼の頭を避けて飛んでるぞ」

A 「当たらなければよいが」

B 「阿呆、そんなことが起こると思ってるのか」

A 「当たり前だろ。一発頭に命中すればお陀仏だ」

B 「当たり前だと。鉄の弾は国王には当たらないのさ」

A 「それはどうしてだ」

B 「いいか、兄弟、俺は老兵で七年戦争にも参加したのだ。だから俺の言うことは信じるんだ。王冠を戴いた頭には鉛や鉄の弾丸は当たらないのだ——逸れて落っこちるんだ。たとえ国王があその砲列の真下に馬を進めてもな」

A 「そう言っても敵の弾に当たって死んだ国王たちの話を聞いてるぞ」

B 「そりゃそうだが、兄弟、それは別種の弾だったのさ。銀の弾だったんだ。いいかね、兄弟、フランス軍が俺たちのおやじに命中させようと思うなら、銀の霰弾をこめなくっちゃならないんだ。そうすればおやじはじきにお陀仏さ」

A 「そういうことならおやじは悠然と馬を進められるわけだ」

B 「そうだと。おまけにプロイセンの国王たちは剣にも弾にも傷つけられないという特権をもっているんだ。だから〈フリッツおやじ [= フリードリヒ大王]〉は七年戦争中によくポケットから両手いっばいに鉛弾を取りだしたり、大砲の弾を帽子で受けとめたりしたものだ」

A 「ねえ、兄弟、お前の言う通りかもしれない。だからプロイセンの国王たちは単独で戦場に姿を見せたりもするんだろう。だが弾に当たって死ぬ心配があるとなれば、彼らもおとなしく国に留まっているだろうさ。それなら国王らだって皇帝やスペイン王やその他の王たちと同じようにするだろうさ。この連中はみんなおとなしく国に留まって、自分のために兵士らが射たれて死んだり、不自由な体になったりしても知らん顔してるんだ」。Ebd., S. 166ff. 『革命』72頁以下。

### 3. 戦時のプロイセン軍

ラウクハルトは 1790 年のシュレーゲン出兵と 92 年の対仏戦争の二回、実戦を経験した。もっとも、前者では戦闘らしい戦闘のないままライヒェンバハの講和が成立し、撤兵してしまうため、厳密には実戦経験とはいえないかもしれない。だがここではこの出兵も含めて、戦時のプロイセン軍の様子を彼の記録から探してみたい。

#### (1) 行軍と宿営

行軍について、ラウクハルトはどちらの出兵時の行軍についても記録を残した。まずシュレーゲン出兵では、ハレの駐屯地を出発した当初の行軍で、若い兵士たちが最初から陽気に愉快にしていた一方、年輩の者たちは頭を垂れ、不服そうに見えたという。しかしながら「そのうちに次第に陽気な活力が全体に拡がり、連隊全体が愉快な兄弟の一団と化した」。行軍時の兵士たちは歌い、歓声をあげ、しばしば「えげつない猥歌」も歌った。猥歌の合唱を「軍隊の属性の一つらしい」と観察するラウクハルトは、これをまったく不快に思っていない<sup>(57)</sup>。

シュレーゲン出兵時の行軍がこのような和気あいあいの、牧歌的とすら感じる風景であったのに対して、対仏遠征時のそれ、とりわけヴァルミーの敗戦後の退却行軍は、きわめて悲惨であった。撤退を始めておよそ十日後、惨状は日ましに大きくなり、「プロイセン軍の行軍した道筋は死馬に埋め尽くされた感があり、五歩毎に倒れた馬がいた」。その有様は「何とも恐ろしい光景」であったが、行軍はこれらの馬を踏み越えて続けられた<sup>(58)</sup>。兵士たちはきわめて過酷な行軍を強いられた。「靴もはかず泥濘の中を足をひきずり、「とがった石で切って足を血だらけに」する者が続出したのである。中には「ぼろ切れや干し草を足にまきつけて鋭い小石から足を守る者」もいたという<sup>(59)</sup>。

出征時の宿営についても、二つの遠征それぞれについて記述がある。まずシュレーゲン出兵時に経験したベルリンでの宿営では「大ていが人間の寝所というより野獣の窩に似

<sup>(57)</sup> Leben und Schicksale, Bd. II, S.400. 『断面』 302 頁。ブレーカーの記録にも行軍について述べた部分があるが、そこで彼がまず最初に記しているのは、脱走への期待と過重な装備による身体的苦痛である。「誰もがロバのように荷物を背負わされた。…だからはじめのうちは、この荷重で窒息するにちがいないと誰もが思った。ビッチリとした軍服と、あの真夏の酷暑がこれに輪をかけ、時には、真っ赤に燃える石炭の上を歩いているかと思えるほどだった。…すぐに全身汗まみれになり、のどが渇いて死にそうになった」。『自伝』 125 頁。たしかにブレーカーの出兵が暑い 8 月で、ラウクハルトのそれは天候に比較的恵まれた 6 月であったが、それにしても両者の描写のトーンには、あまりにも大きな隔たりがあると言わざるをえない。

<sup>(58)</sup> Leben und Schicksale, Bd. III, S. 194. 『革命』 84 頁。

<sup>(59)</sup> Ebd., S. 212f. 『革命』 92 頁。

た部屋に投げ込まれた」ため、兵士は非常に不満であったが、「他にどうしようもないので我慢せざるをえなかった」とラウクハルトはいう。その原因は、本来宿営を請け負うべき市民が「より貧しい人びとに、特に兵士の女房やその同類に金を与えて兵士の宿営を肩代わりさせている」からであり、結果として兵士は彼ら貧民の住居の地下室や屋根裏に宿営する羽目になったのである<sup>(60)</sup>。ちなみに、七年戦争時にベルリン近郊のケーベニツクに宿営したブレーカーもまた、この宿営について記しているが、そこで描かれているのは、宿主から物品や食糧をゆすりたかる軍人たちであった<sup>(61)</sup>。市民の計略によって兵士が不利益を蒙ったと述べるラウクハルトと、乱暴な兵士によって市民が不当な搾取を受けたと言うブレーカーは、視座がまったく反対の方向を向いている。

対仏遠征の退却時には野営が行われた。上述のように、この退却行軍は悲惨きわまるものだったため、野営においてもまた「死の静けさが支配した」。ラウクハルトによれば「野営地での兵士はふだんは生き生きとして陽気で、歌ったりいろんなことをやって時間を過ごし、嫌なことを忘れてしまうもの」であるが、この時の野営では「悪態つくとか仲間と口論する者を別にすれば、大きな声も聞かれず」、「温かい言葉などすっかり廃れて」いたのであった<sup>(62)</sup>。

対仏遠征ではもう一つ、ドイツまで退却を終えた後の冬期宿営について、ラウクハルトは興味深い逸話を記している。それは、宿营地周辺の群衆向けに、敵を誹謗する人形芝居が上演されていたというものである。金儲けのために軍隊を追従する一隊の中には操り人形芝居の一座もあり、この一座は『欺かれたキュスティーヌ』と題する笑劇を十八番にしていた<sup>(63)</sup>。劇中のキュスティーヌは「道化役 of 召使いといっしょになってありとあらゆる残虐行為をやったのけ」、最終的に彼は「悪魔によって千裂きにされる」という筋書きであった。紳士淑女をはじめとして群衆はこの芝居に拍手喝采を送ったが、興味深いことにやがて軍の意向によってその上演は禁止された。というのも「フォン・タデン氏[歩兵第三連隊長]を含む数人の将軍が、敵の将軍とその国民をこんなに公然と誹謗するのは無礼だと痛感」したからである<sup>(64)</sup>。将軍たちをこうした行動へ駆り立てたのが騎士道精神だったの

<sup>(60)</sup> Leben und Schicksale, Bd. II, S. 404f. 『断面』 304 頁。

<sup>(61)</sup> 「どの家でも、ものすごい勢いで食料が食い荒らされた。…「おい！ 家にあるものを残らず持ってこい！」という声が、いつも聞こえた。…たしかにどの家にも、紀律をきちんと守らせるために、将校が一人ずつ配属されていた。だがたいいていの場合、彼らがいちばん始末に負えなかった」。『自伝』 125 頁以下。

<sup>(62)</sup> Leben und Schicksale, Bd. III, S. 192f. 『革命』 83 頁。

<sup>(63)</sup> キュスティーヌとは、アダム・フィリップ・ド・キュスティーヌ (Adam Philippe, Comte de Custine, 1740-1793) のことで、この時彼はヴォージュ軍最高司令官として、プロイセンと交戦中のフランス軍を率いていた。

<sup>(64)</sup> Leben und Schicksale, Bd. III, S. 297f. 『革命』 113 頁。

か、ドイツ啓蒙の重んじた教養だったのかは分からないが、いずれにしてもこの時のプロイセン軍は、国民戦争の渦にまだ完全に飲み込まれてはいなかったことが分かる。

## (2) 掠奪

掠奪に関する記述は、シュレージエン出兵の時には見当たらない。記述が集中するのは対仏遠征の初期においてである。ラウクハルトによれば、遠征当初のプロイセン軍が己を過信し、敵をあまりに見くびったため、杜撰にも兵站が整うのを待たずに行軍を開始したようである<sup>(65)</sup>。それゆえ、フランスに侵入したプロイセン軍は早々に「そこらじゅうの穀類を手当たり次第に刈り取り、引きぬき踏みにじった」。すると「八ないし十カ村の一年間の食糧を作っていた一帯が、一時間足らずのうちに見る影もなくなった」。金目の物が見つかり、それを持ち出して従軍商人に売り、亜麻布、衣類、食料など兵士が自分で利用できる物は着服し、それ以外の物は叩き割ったり壊されたという。ラウクハルト自身も羊を一頭盗んだと告白している。この行為に対して彼は、「お前が取らなくなったら他人が取るかどこかへ迷って行くだけのこと」であり、逆に何もしなければ「私は自分の利益も計れない阿呆だと思われよう」と自己弁護している<sup>(66)</sup>。

掠奪に関しては、ラウクハルトとブレイカーの間に視座の差は見られず、描写はほぼ共通している。また二人はともに、将校の許可する掠奪があったことも指摘している。ただし、ブレイカーの記述が「将校が許可、もしくは半ば黙認でもしようものなら、村人たちはぐうの音も出なかった」という淡泊な一文にとどまるのに対して<sup>(67)</sup>、ラウクハルトはもう少し詳しく事情を語っている。彼によれば、多くの上官は盗みや掠奪を禁止しようとしたものの、実状を把握していなかったし、またそうする気もなかったという。なぜなら掠奪の禁止は、士気の低下につながったからである。ヴァルミー戦の前日はその典型のような事例である。「この夜はすさまじい風がごうごうと吹き荒れ、たまらなく寒く」、またその付近に森林などがなかったため、プロイセン軍兵士は大学して村々へ駆けつけ、木製品を手当たり次第に掠奪し、「地獄火さながらに火を焚いた」。一人の将校がこのむごたらしい掠奪と放火を制止しようとしたが、成功しなかった。「他ならぬこの時に、敵に対する攻撃の起こりそうな前日に、獲物狩りをやった連中に厳しい処置をとるのは時宜をえない

<sup>(65)</sup> 「だがこうなった [= ヴァルミーで負傷した兵士のほぼ全員が死亡した] のは、フランス軍が私たちの指一本なりと射ち碎くことなどあるまいと、かたくなに信じられていたためだ。ところがそれが誤算で、しかも無残な誤算だった」。Ebd., S. 170. 『革命』 74 頁。

<sup>(66)</sup> Ebd., S. 107ff. 『革命』 53 頁以下。

<sup>(67)</sup> 『自伝』 131 頁。

のではないかと、説得された」からである<sup>(68)</sup>。

### (3) 衛生と軍病院

対仏遠征時の衛生と病院施設について、ラウクハルトはプロイセン軍の実態を赤裸々に述べ、「どこの軍隊にも当時のわが軍ほどひどい体制は考えられない」とこれを厳しく糾弾する。彼の観察によれば、前述のように過信した同軍が兵站の準備を怠ったため、すでにフランスへ入る前からきわめて不衛生な環境を余儀なくされたのであった。例えば、夏の炎天下の行軍で喉の渇いた兵士たちは、モーゼル川の水をがぶ飲みしたのだが、「この川の水自体がもともと水質が悪く腐臭のする水」であった。おまけに川の「そこらじゅうに馬糞が漂い」、兵士や娼婦たちが「汚れた下着を洗」ったため、水は不潔きわまりなかったという。兵士はこのような水を大量に飲んだのであり、彼によればこれこそが「プロイセン軍の多数の生命を奪い去ったあの恐るべき赤痢の第一の原因」であった<sup>(69)</sup>。

フランス侵入後、今度は雨にたたられるようになると、彼らの「下着類までが背囊の中で<sup>か</sup>黴びて」しまい、「厄介極まりない不快そのもののノミ、シラミの類が耐え難いまでになった」。しかし、何にもまして兵士を苛酷な目に遭わせたのは「下痢の蔓延であり、それに続く恐ろしい赤痢だった」。便所は「毎日掃除しても毎朝殺人的な様相を呈」した。そこでは「いっさいが血と膿様のものにまみれ、何回か不運にもその中で死んでいる者が見られた」ほどであった。つまりラウクハルトによれば、プロイセン軍はすでにヴァルミーの戦い以前から、不衛生で発生した赤痢により相当数の兵員を消耗していたのである。その割合は全軍の八分の三ほどであったと彼は言う。こうして「みんな死人のように見え、足をひきずって歩くだけの気力もほとんどなかった」プロイセン兵士は、ヴァルミー戦当日には「ほとんどがすでに病人で、全員が疲労困憊し肌までびしょ濡れになっていた」<sup>(70)</sup>。不衛生は近世軍隊の——この点に関しては、近世前半の傭兵軍時代と後半の常備軍時代とでほとんど変わらなかった可能性が高い——大きな特徴であるが、ラウクハルトの証言はその現実をありありと伝えており、非常に興味深い。

同じような衝撃的な光景は、彼が「殺人窟」と呼ぶ軍病院に関する記述の中でも語られている。ヴァルミー戦の一月ほど後、彼が訪れたロンウィの野戦病院では「入口で早速すべてが排泄物で濡れて光って」おり、手近な部屋に入ると「そこでもたちまち気が遠くなりそうなものすごい悪臭」が彼を襲ったのであった。藁布団に寝る傷病兵は少数で、大

<sup>(68)</sup> Leben und Schicksale, Bd. III, S. 151f. 『革命』 69 頁。

<sup>(69)</sup> Ebd., S. 92f. 『革命』 49 頁。

<sup>(70)</sup> Ebd., S. 148f. 『革命』 67 頁以下。

多数がむきだしの藁の上か、固い床にじかに横たわっていた。短いほろ切れで体を覆っただけの兵士も多く、それにはノミやシラミが山ほどたかっていたため、「まるで彼らは生きながら虫に食われるふうだった」。藁はないも同然で、「わずかばかりのパンを支給されるだけで後は何もない」状態であった。このようなロンウィの野戦病院の惨状が例外かもしれないと考えたラウクハルトは、その後いくつかの野戦病院を見て回ったが、結局「すべてこれと大同小異であった」<sup>(71)</sup>。およそ病院と呼ぶに値しない粗末で不衛生な設備という点では、ブレーカーの描く軍病院の様子もこれとほぼ変わらない<sup>(72)</sup>。

興味深いのは、ラウクハルトが軍病院のこうした惨状の原因を、自己の観察に基づいて究明しようとしたことである。それは、彼の仲間が「このおぞましい殺人的なはざまで耐えざるをえなかった悲惨を」何度となく見たからであり、ろくな看護も受けられずに「惨めたらしい家畜よりも惨めなふうに棄てざるをえない兵隊の運命」に激しい憤りを感じたからに他ならない。軍病院という「忌むべき恐怖の無法状態」を改善するために、原因追及へと彼を動かしたのは、こうした仲間意識と強い正義感であった。そして彼は、次のような鬼気迫る告発をするのである。

ブロイセンの軍病院の重大な欠陥は、私が思うには、その制度自体にある。監督者はおまじら軍人で、それに相応しい経験も知識もなく、ほとんどが自分の懐を肥やそうとする連中ばかりだ。彼らの給与は悪いが、それでも長く勤務せずに、また素寒貧できても、そこを去る時には必ず財布がふくらんでいる。つまり、病人の賄い料をごまかし組織全体の運営を乱脈にして、ごまかしが簡単には発覚しないようにするのだ<sup>(73)</sup>。

ラウクハルトは、「国王が病人を十分に治療し、たとえ月に 1,000 ターラー余計にかかっても彼らのためにしかるべき配慮をせよと命令して」いたのを承知していた。にもかかわらず、その恩恵に預かるべき傷病兵たちが上記のように、家畜以下の扱われ方で放置されていたのは、軍病院関係者の中に「病人の賄い料をごまかし組織全体の運営を乱脈に」する人々がいたからだ、と彼は言うのである。例えば彼は「軍医や看護人たちが病人用と決められたワインを気儘に飲んだり、うまいものを自分らで食らう」のを見ているし、「軍

<sup>(71)</sup> Ebd., S. 245ff. 『革命』 100 頁以下。

<sup>(72)</sup> 「各ベットには、惨めな姿になった人たちが快復の見込みもほとんどないまま、それぞれ死をじっと待っているのである。こっちでは、軍医の治療を受けながら、哀れな叫び声を張り上げる者が何人もおり、あっちでは、半ば踏みつぶされた虫けらのように、毛布にくるまって身を縮めている者がいる。多くの者たちの手足は、腐りかけていたり、あるいはもう腐ってしまっていた」、『自伝』 116 頁。

<sup>(73)</sup> Leben und Schicksale, Bd. III, S. 248f. 『革命』 101 頁。

医たちの情事のお相手だった二人の娼婦が、病院から米を持ち出して売った」ため、病人たちはひもじい思いをしたとも述べている。また「軍病院に監督官として配置されている将校を相手に、外科医長自らが薬剤や酢、ワインなどの費用を賭けですってしまい、その結果これらの物品を購入できずに医療をなおざりにした」という出来事も、憤慨しながら告発する<sup>(74)</sup>。ラウクハルトの見るところ、軍病院の欠陥は、国王の命令と資金を実質的に骨抜きにしてしまう、軍医や看護人といった中間搾取層によるものであり、ひいては彼らを排除できない軍隊の組織的体質にあった。彼のこの指摘は、三十年戦争時代を描いた『阿呆物語』の木の例えをまさに彷彿とさせる<sup>(75)</sup>。衛生と病院という領域はやはり——革命フランス軍の病院ではこうした中間搾取層を見なかった、というラウクハルトの証言があるだけになおさら——、近世軍隊の組織としての特徴を鮮やかに映し出す可能性が高い。

## 結びにかえて

ラウクハルトによるプロイセン軍の観察や洞察は、ブレイカーの証言だけからでは知り得ない、きわめて重要な論点をいくつも提供していたように思われる。主だったものだけを挙げても、兵士の生活態度についての世評と実態のズレ、よい将校と悪い将校の極端な差、妖術や迷信までも含む信心深き兵士のメンタリティー、さらには野戦病院に代表される、国王の命令を骨抜きにする組織的体質などである。これらはいずれも、近世常備軍の特質を考える上で決定的な重要性を持つであろう証言であり、さらなる研究の積み重ねを通じて検討されねばならない。

ともに末端の外国人兵士であったにもかかわらず、ブレイカーの記録から浮かび上がるプロイセン軍のイメージとラウクハルトのそれとの間は、かなり大きなズレがあった。前者の描くプロイセン軍が総じて威圧的、非人間的で、ひたすら厳格な紀律と服従の貫かれた組織であったのに対して、後者のそれでは、陽気な兵士たちに加えて、一部であるとはいえ末端の兵士にも多くの理解と共感を示す将校の姿がとても印象的であった。このように、両者の軍隊像は正反対といってもよいほどの開きがあったのである。はたしてこれを

<sup>(74)</sup> Ebd., S. 253. 『革命』103頁。

<sup>(75)</sup> 「将校たちが最も悦に入る結構な稼ぎときは、軍事委員が姿を見せて、箕にいっぱいの黄白を木にふりかけ、木に生氣を取り戻させようとする時であって、そういう時に上枝の連中は落ちてくる黄白のめぼしいのを受けとめてしまい、下枝の連中へはほとんど何も落としてやらなかった。そのために、下枝の連中は敵前で死ぬよりも空腹で死ぬ者の数が多かったが、上枝の連中はこの二つの危険のどちらからも超然としているらしかった」。グリンメルスハウゼン『阿呆物語』望月市恵訳、岩波文庫、1953年、上巻89頁。

どう考えればよいだろうか。各人の印象はそれぞれの個人的体験に左右されるため、もとより差異があつて当然である。しかし両者の相違がここまで大きい以上、近世常備軍をより精確に理解するためには、これを整合的に説明しうる背景因を探ることがやはり重要となろう。以下ではこの点について述べて、本稿の結びとしたい。

両者の違いの背景としてまず指摘すべきは、入隊理由に由来する、兵士としてのモチベーションの決定的差異である。強制徴募で不本意に入隊したブレーカーにとって、そもそも自分が兵士であること自体不当であつた。彼を軍隊に繋ぎとめていたのは、残酷な刑罰への恐怖のみであつた。このようなブレーカーの描くプロイセン軍は、当然否定的なものにならざるをえなかった。これに対して、自発的に兵士になったラウクハルトの記述からは、軍隊生活——たしかにはじめは不慣れゆえ相応の労苦を伴ったが——に否定的なイメージはほとんど感じられない。むしろ、学者というきわめて稀な前歴ゆえに、兵士からも将校からも特別扱いされた彼にとって、プロイセン軍は居心地のよい場所ですらあつただろう。ブレーカーとラウクハルトは、不本意入隊兵と志願兵という、近世常備軍の異なる兵士類型を代表する兵士であつた。そして、まさにこの兵士類型の違いにより、両者の帰属意識は決定的に異なつたのである。

二人が正反対の軍隊像に至つた理由は、入隊方法以外にもなおいくつか考えられる。その一つは、ブレーカーが四カ月の新兵教練期間を過ごしただけで出征・脱走したため、教練期間を経た後の、本来の兵士の生活をまったく経験していないことである<sup>(76)</sup>。もっとも厳しい新兵教練期間が終わり、非番兵になれば軍務はほとんどなくなるので、もしブレーカーが兵士を続けていれば、彼の軍隊のイメージも変わったかもしれないのである。もう一つ考えられる要因は、プロイセン兵士に第一に求められた身長である。ブレーカーが正規の規定すら満たせない「出来損ない」の兵士だったのに対し<sup>(77)</sup>、ラウクハルトは181センチの大男で、戦闘時の戦列においても、もっとも重要な役割を担う第一列に配属されていたのである<sup>(78)</sup>。低身長のブレーカーは、プロイセン兵士としては特に恵まれない環境にあつたのであり、それもまた彼が否定的な軍隊像を増幅させる大きな要因であつた。彼と

<sup>(76)</sup> 阪口「兵士の日常生活」149頁。

<sup>(77)</sup> 同上143頁。ちなみに、プロイセン兵士の最低身長は、軍人王の時代には5フース（Fuß：以下ではこの単位を省略）6ツォル（Zoll）=172.6センチ、フリードリヒ大王の時代は5ツォル=170センチと定められていた。3ツォル=164.8センチ以下の者は、1733年の王令により徴集の対象外とされ、0ツォル=157センチ以下の者は戦時にすら動員されない不適格者だった。鈴木『広義の軍事史』123頁、同「連隊簿」144頁。

<sup>(78)</sup> Stadtarchiv Halle, HB B-18-1, Bl. 101/102. 連隊録に記されているラウクハルトは身長5フース9ツォル2シュトリヒ=180.8センチで、マンデルスロー中隊（第7中隊）の第1列10番であつた。鈴木「連隊簿」159頁。

ラウクハルトの身長差は、そのまま軍隊のイメージ差に直結していたといえよう。

さらに留意せねばならないのは、ラウクハルトがプロイセン軍の中で特権的ともいうべき境遇にあったことである。非番兵の副業として中隊長の子供の家庭教師をしたこと、その中隊長の家を自由に入出入りできたこと、高額を保証金を支払って数カ月の帰郷の旅をしたこと、遠征軍司令官が面会に出向いてきて知的談義をしたことなど、それは枚挙に暇がない。ラウクハルトが経験したこれら多くの出来事は、ブレーカーをはじめ、ほぼすべての兵士にとって無縁だったであろう。なぜラウクハルトだけこのような特権的境遇に恵まれたのだろうか。それはひとえに、彼が啓蒙の知識人だったからに他ならない。学者という物珍しい前歴だったからこそ、彼は多くの同僚兵士たちから尊敬され、啓蒙の将校からは厚遇されたのである。問題なのは、なぜ「啓蒙の兵士」がこれほどの「特権兵士」になりえたのかということである。それは、18世紀末のプロイセン軍が「軍隊の啓蒙」によってすでにある程度変質していたからではないだろうか<sup>(79)</sup>。ブレーカーが在籍した七年戦争勃発時（1756年）からラウクハルトの入隊までにはおよそ四半世紀の隔たりがあるが、その期間はまさに、プロイセン軍で「軍隊の啓蒙」が大きく進展した時代なのである。ラウクハルトが語るミュフリンクやブラウンシュヴァイク公は、「軍隊の啓蒙」により要請された「教養ある将校」そのものであった。こうしたタイプの将校は、ブレーカーの時代にはまだ皆無に近かったため、彼の証言の中でプロイセン将校が総じて威圧的であっても、それは驚くにあたらないのである。ブレーカー以後の四半世紀の間に、プロイセン軍は「軍隊の啓蒙」により変貌を遂げた。このプロイセン軍の変質こそ、ラウクハルトを「特権兵士」にしたものであり、彼とブレーカーとの距離、両者の軍隊像の差異をさらに著しく拡げたものだったのである。

〔付記〕本稿は、中央大学特定課題研究費「広義の軍事史の総合研究としての連隊史」および科学研究費基盤研究（C）「近代移行期の都市空間における兵士と地域社会の関係——プロイセン軍駐屯都市ハレを例に」（課題番号 16K03139・研究代表者丸嶋宏太）の研究成果の一部である。

<sup>(79)</sup> 軍隊の啓蒙については、鈴木『広義の軍事史』145頁以下を参照のこと。